早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書（Web 公開用）

申請者（ふりがな）	西原　希里子　　（　にしはら　きりこ　）
所属・資格（※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載）	修士課程２年
発表年月 または事業開催年月	2022 年　11 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本健康心理学会第 35 回大会
発表者（※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること）	西原希里子・姜来娜・嶋田洋徳
発表題目（※学会発表の場合のみ記載）	小学生における感情への評価とコーピングレパートリーがストレス反応に及ぼす影響

発表の概要と成果（抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。）

【目的】

本研究では，感情への評価とコーピングレパートリーがストレス反応に及ぼす影響について検討することを目的とした。

【方法】

研究協力者　関東圏の公立小学校に在籍する３年生～６年生 76 名のデータを分析対象とした。

測度　フェイス項目（性別，学年，クラス，出席番号，年齢，氏名），感情への評価（感情に対する評価；樫村，2010），ストレス反応（小学生用ストレス反応尺度；嶋田他，1994），学校適応感（日本語版学校肯定感質問紙；大対他，2006），コーピングレパートリー（小学生用コーピング尺度；嶋田，1998）

倫理的配慮　本研究は早稲田大学の「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された（承認番号：2020-281）。

【結果・考察】

感情への評価とコーピングレパートリーについて，一元配置分散分析によって学年による平均値の差を検討した結果，有意な差はみられなかった。また，感情への評価とコーピングレパートリーがストレス反応に及ぼす影響を検討するために，階層的重回帰分析を行った。ストレス反応を目的変数として，Step 1 では感情への評価，Step 2 ではコーピングレパートリー，Step 3 では感情への評価とコーピングレパートリーの交互作用項を説明変数として投入した。その結果，小学校高学年は，感情に対する否定的な評価をしていても，コーピングレパートリーを多く獲得していることによって，ストレス反応の増大にはつながらない可能性が確認された。その一方で小学校中学年と高学年との間では，コーピングレパートリーの数に差がないことを踏まえると，コーピングレパートリーを獲得していても場面や状況に応じて柔軟に使い分けることができていないことによって，ストレス反応が高まっている可能性が示唆された。したがって，感情に対する否定的な評価が高い者に対する支援においては，コーピングレパートリーを十分に獲得させた上で柔軟に使い分けられるように支援を行うことの重要性が示唆された。

利益相反開示：発表に関連し，開示するべき利益相反関係にある企業などはありません。

※無断転載禁止